### ま 11





猶不能不以之興懷 保多孝三著『柞廬印存』(二)

#### 猶不能不以之興懷 「蘭亭序」より

28行324字の蘭亭序は、王羲之が書いた書道史上最も有名な作品。 現存するのは模写。本物は太宗皇帝の墳墓に副葬させた話は知られてゐ る。このやうに書作品が先立つものを篆刻にするのは普通の作品とは取 組み方が違ふことであらうか。刻された前後の文は「及其所之既倦、情 隨事遷、感慨係之矣。向之所欣,俛仰之間,已為陳跡,猶不能不以之興懷。 況修短隨化,終期於盡。」下線の所は、「猶ほ之を以て懷ひを興さゞる能 はず」と読下すがもつて回つて分りにくい。意訳すると「以前あれほど 喜んでいたことでも、しばらくたつともはや過去の事跡となることもあ ります。だからこそおもしろいと、思わないわけにはいかないのです。」

この作品はことのほか多字が刻されて居て興味が湧く。一字一字じつ くり彫込まれた作品は何時までも見飽きぬ。

#### 白黑テレビ

正面の細コスモスといっ 名 男 白 黑のテレ しよに 面 あと いつも空を見る り た 生 0) ま 松 ま 魂

工

貝

れば 天 わが に 秋 胸にゐ 来 7 し 黄 ゐ 虫 り る 盆 し

秋は

貝

目

覚

町 Ξ 佐 藤 喜 孝

端 田 中 穂

田

Ξ 光 坂 東 亜 未

運 ば 秋 幸の鐘 き 初 んざい 会 め 五点 の楚々 男 食 O唱 で 0) は 0) 子 間あ 一瞬 あ 子 り 等 V し 運 が 教 気 澄 んば 会 な む  $\sim$ 

#### 汗

富

田

長

崎

桂

子

す 除人秋 0) こ草 工 涼 0) 汗 帽 雨 子 桜 弦 に 並 O塩 月 木 樹 0) 反 を 空 歩 0)  $\Box$ 柄 髪 澄 む 射 書 時 に る む

宮 早 崎 泰 江

大

犬 秋 ど 窓 八 月 を Z 天 打 と B る つ 鴉 為なる 雨 OO音は 声 心 匂 日々を過 0) 細  $\mathcal{O}$ げ げ  $\mathcal{O}$ Oび き 昼  $\mathbb{H}$ 暑 を O去 た 虫 る な り り

田 町 堀 郎

河

パ

ントマ

イム五百

羅漢は

秋思のう

た

曼

沙

華

権

現

堤 あ

れ

ば

そ

割

か

け

算忘れ

ぬ

やうに

き

高

き

 $\sim$ 

登

る

征

服

感

を

信

つ

目

O

指

を

入

れ

たる

暑

さ

な

∮

申 # 森山のりこ

五. 出 Щ 高七 雲 は 原 合 は 間 茸 は 光 る Oか ず ザ に 散 O佐 を 渡 切 る 透 り B 白 き 分 落 通 る 槿 暉 る に

#### 合歓の花

流烏 縁 手 0) O日 さ 中 る 子 O花ラ 0) る 負 ヂ 子 んぶ 0) IJ 等 才 出 啼 体 蝗 0) き 目 金 虫 操 ピ 歓 止 は 声 む 青 杉 に 1] 木 桃 る す む

含 森 理

和

落

う  $\prod$ 八 音 た 月  $\mathcal{O}$ ま に せ 湯 の きの 花 いつし の湯け 柱 昨 を か 日 き 慣 見 む Oあ れ た り 流 土 る てすすき げ 0) 昼 れ 琥 星 餉 つ 月 0) 夜 穂 5 色

\* 町 三 吉成美代子

踊の輪蝶々てふてふとはい秋の湖人差指をおとして

む

る

鍋

屋

丁

吉

弘

恭

子

南 つ 0) 風 そ Þ O猫 0) び 尻 尾 猩 暮 0)  $\mathcal{O}$ うごく は 手 うご る な

7

野 納 朗 すずなりの柿てらてらとやつと立 じみ蝶松葉ぼ 読 7 る ラ 石 た  $\lambda$ 5 に に とどまれ す 岸 り つ

捨 宮 7 き ラ 0) ケ 音 ツ 0) め Oき IJ 写 Z 真 を Oり 整 あ と 理 0) 7 涼 養 0) た 暮 본 訓 で

実

曳 舟 遠 藤

て 激 合 は て厨辺に立つすべ L き 夜 ぬタテヨコ く秋となる な り 胸 熱 ŧ は 日 帯 な か な 夜

計

算

0)

名

月

O

あ

り

る

夏

負

け

0)

か

子 鎌 倉喜久恵

逗

木村茂登子

曼

沙

ŧ

哀

き

5

B

O

す

き

石

柱

O

5

聖

域

蝉

ドこ

O

宿

走

0)

虹

力

と

置

涼

れ所

白

触っ見 老 夏 き 不 角だせば可愛くも見えな。 す け 訳 嫌 五. ま詫 が 7 び を 7 を り を Z り 萩 め 蛞 蝓 花 5 殿

#### 新橋・残暑

風大た 炎 に 乗 昼 に 0) さ ボ 円 さ に も 落 の店西 架 0) ち り 出 7 日 さ 天 現 す す る  $\sim$ 

京

橋

篠

田

純子

新 を 見 れ を 0) B O見 れと思ふ 0) 髪 あ 雨 ま 切 目 を 間 0) も な さ 0) < ょ す 来る み り 折 さ り る

ᡑ 木 芝 尚 子

千

冠 道 で 雪 す ぞ Z け る き 咲き終 は さと便 ぬ 5 け 枚 落 か 羽 5 り 葉 る 織 便 吹 メ る き り る 雨 7 り り

そ

初

さ

山寺前 芝宮須磨子

宝

深 南 き 太 Oま 一 る 馬  $\mathcal{O}$ う 車 ち  $\prod$ 妻 天 Oた な  $\aleph$ り川な 7

秋 虫 秋 か Oに 夫 き 古稀 に グ ラ 小 Oス 迎 ふ さき 上 散 り 青 月 か な 線 り り 埃

> 沢 須 賀 敏

> > 子

正黙茄バ百 子 眼示 イ 白 な ク にの り 0) 5 戒 とさき忘 軽 口 震 て太宰 に 明 れ 易  $\sigma$ 夏 忌 衣

> 竹 弘 子

浦

續 木 文

子

夕川立夏

葵

ŧ

木へ見す

空ぬ

の村

天 は

のず

る川れ立ち

<u>\f</u>

B

草

S

変

夜

迎

山火

に

汗

ていば

ح

ら

王た

#### 前月作品

消 炎 玉 豊 夏 え か 蝶 音 天 は な に を 下 7 追 る 聞 耐 7  $\mathcal{O}$ 稲 き 越 O $\wedge$ 田 ち さ 7 に ま 耳 れ 無 日 な た に 暮 言 うら る は  $\mathcal{O}$ つ O補 た に ま 喫 聴  $\mathcal{O}$ 大 づ 煙 文 器 た き 字 所 が بح ぬ 遠 赤 渡 木村茂登子 鎌倉喜久恵 座 邉

典

子

実

友

七

子

子

和

近 花 力 今 大 水 死 額 な ツプ つ 朝 甕 き 道 0) 0) 0) 贔 か Z を 0) 7 花 中 な 屓 ラ つ ょ き 吅 ゆ 影 き くやす 0) と 熱 き い 墓 メ 0) お 校 筈 き 7 て ン 音 سے 茶 歌 0) 金 行 急 5 と ろ す つ か に 子 そ 魚 流 あ る さあ 食 は 手 0) Oれ Oう ~, に り な 時 名 に 見 る り 蚊 た 盂 残 至 を ゆ 夏 蘭 り ろ 天 福 呼 遣 百 浜 0) を 盆 瓜 ょ 3 焚 ~, 昼  $\exists$ 会 粉 紅 顔 空 り り り り 早 吉 Щ 森 堀 長 田 佐 森山のりこ 弘 荘 崎 崎 内 藤 内 中 亜 恭 泰 桂 慶 理 藤 弘 喜

郎





江

子

未

穂

子

孝

浅

間

嶺

に

IJ

ユ

ッ

ク

を

置

け

ば

蟻

走

賀敏

子

喜孝

5

に

ち

B

3,

台

高

昼

寝

覚

定梶じょう

東

閑

堂

行

き

ŧ

帰

り

蝉

時

雨

芝宮須磨子

遠

ょ

り

戻

り

B

う

な

晝

寝

覚

尚

子

プ

ラ

ツ

ク

ラ

ヴ

蓮

池

O

底

0)

底

田

純

子

# かなぶんが踏まれてをりぬ東京都 佐藤喜 著

日本国の首都。生粋の東京都。
日本国の首都。生粋の東京生まれの人はどのくらい居るのであろうか。小さい頃から虫を見たり触ったりして育っていないと大きくなってからはなかなか親しめない。が、嫌いではない人はいっぱいいる。作者は好きなようだ。忙しい日を送っているとつい道路の虫には気にもとめないで通り過ぎてしまっている。ところが作者は違っていた。人に踏まれているかなぶんが気になって気になって俳句になった。気持ちは五七五気になって気になって俳句になった。気持ちは五七五気になってくる。座五の「東京都」が面白い。多種身様な人間の集まりである東京都。

# 運不運金魚すくひをはじまりに 堀内一郎

であった。陣取り・かくれんぼ・鬼ごっこ等その中で小さい頃は遊ぶものと言ったら、道具を使わない遊び子供の頃の縁日で先ず遊ぶのが金魚すくい。私達の

唯一金魚すくいは親と行き、物を使って遊ぶもので唯一金魚すくいは親と行き、物を使って遊ぶものであろう。親との会話が沢山あっただろうとはかたのであろう。親との会話が沢山あっただろうとは像できた。

# カップラーメン急に食べたし浜昼顔 森 理和

はよく分かった。浜昼顔の斡旋で、何故に海を見ていいまった。好きでない人には分からないことだが、私に思った。好きでない人には分からないことだが、私に思った。好きでない人には分からないことだが、私に思った。好きでない人には分からないことだが、私に思った。好きでない人には分からないこと、生産量も世界という。好きでない人には分からないこと、生産量も世界はよく分かった。浜昼顔の斡旋で、何故に海を見ている。中間はよく分かった。浜昼顔の斡旋で、何故に海を見ている。

り合わせの妙ですね。
てラーメンと結び合ったのかが面白かった。これが取

# 夏蝶に追ひ越されたるつまづきぬ 渡邊 友 七

蝶々の飛んでいる姿は面白い、し楽しい。真っ直ぐに飛んでいてもすぐいなくなってしまう。寸時の楽しに飛んでいてもすぐいなくなってしまう。寸時の楽しみである。暑い日中蝶々も暑かろうと思うが優雅にとみである。暑い日中蝶々を見ていたら追い越され、躓る。この句はそんな蝶々を見ていたら追い越され、躓る。この句はそんな蝶々を見ていたら追い越され、躓る。この句はそんな蝶々を見ていたら追い越され、躓る。この句はそんな蝶々を見ていたら追い越され、躓なである。

# 炎天下耐へて無言の喫煙所鎌倉喜久恵

にそこにいる人々。煙草を吸わない私でも淋しさを感る。そんなに悪いものなら売らないように決めたらよる。そんなに悪いものなら売らないように決めたらよいのにと思っている。今までは国の財源になっていたいのにと思っと。中野駅の南口の駅前に70㎝くらいののにと思うと。中野駅の南口の駅前に70㎝くらいののにと思うと。中野駅の南口の駅前に70㎝くらいののにと思うと。

たのは、私だけだろうか。のだろうか。「炎天下無言」が訴えているように感じじてしまった。まして喫煙者はどのように思っている

# 遠くより戻りしやうな晝寝覚 芝 尚 子

昼寝が出来ない私だが、年に何回かは昼寝をすることがある。昼寝から覚めたとき自分が今居る状態を把とがある。昼寝から覚めたとき自分が今居る状態を把とがある。昼寝か出ぞれる。そんな時出先から戻ってきたような疲労感のような感じがするときもある。少し長い時間の昼寝の時にそんな感じになるようだ。もしかして天の川の浮津に行き遊び疲れたのかも。と夢を馳して天の川の浮津に行き遊び疲れたのかも。と夢を馳してみた。



## あをかき集堀内一郎選



朝露や乳をくれたる人へ粥 穏やかな夫婦の時間曼珠沙華 離まれさうな小さき露草ふまれけり 葉鶏頭通過電車はやや徐行 窓に灯の匂ひ溢るる秋の暮 五分待つ各駅停車そばの花 山裾に白の淋しさ蕎麦の花 が嵐前に抱へる紙袋

森

理和

さかな偏づくしの湯呑夕野分半鐘は満月を得てぶら下がる路地の軒唱歌のやうな月かかる

無一文で右手ばかりがなぜか冷ゆ

妻が居て今日も静かに醉芙蓉

大振りのおはぎ佛へよき報せ

田中

藤穂

定梶じょう 菊の

猫よけの水のくすみや秋の昼

吉成美代子

夕暮れの子供の声や零余飯絵に描けぬものの一つに虫時雨 遠藤 実菊の花家族写真の隅に咲く

花カンナ首より吊す社員証

胡麻のお萩好みし人よ二十日月 長いトンネル抜け出し思ひ夏終る 新涼の風が手足にかんばせに 秋蝶の草花に戯れ潜るかな 草花に寄ればつと飛ぶ秋の蝶 伸びきらぬ手足の体操小鳥来る 秋高し大いなる雲ありてこそ 待ちわびし秋雨水を打ちしほど 秋はじめ住宅街に迷ひ猿 終点の線路またげば月あかり 寿福寺がもっとも盛り萩日 街中の一人となり手秋の風 余所行きの顔で写ってる七五三 素気なき別れもありて萩日和 長崎 芝 鎌倉喜久恵 木村茂登子 桂子 尚子 破れ障子ブーブー紙のさくら型 葉鶏頭背負ひてゆきぬ昼を避け 秋光やシートベルトを〆直す 街路樹をかこみて揺るる猫じやらし うすき雲仲秋の月洗ひ過ぐ 墓洗ふ姉も無口になりにけり 睡蓮や昨日と同じ花の数 葉鶏頭ここでかうしてゐるつもり さくら咲く国のまほろば山裾野 新涼や赤絵の皿に大眞鯛 法隆寺堂内に坐し秋の声 コスモスや隣人の佳き町に住む 佐藤 森山の 早崎 須賀 吉弘

喜孝

恭子

泰江

りこ

敏子

篠田

純子

蹲踞して月のパワーをほしいまま

#### 20

### 佳句後言

# 路地の軒唱歌のやうな月かかる じょう

下町の露地の生活が見えてくる。人情の溜り場とも言える界隈、子等の声も聞こえてきそうだ。「唱歌がこの作の主眼で清らな住民の気質を示している。まじり気のない、お月様。山田耕筰先生曰ている。まじり気のない、お月様。山田耕筰先生曰

# 半鐘は満月を得てぶら下がる じょう

民を安堵させる力を持っている。守り神のように。る。在に古町に梯子の上に吊されている。何故か住都心では見られぬ風景だが地方では今でも見かけ

快く俳諧をにじませる。白眉と言える。半鐘と満月の照応のおおらかさ、中七下五の流れも

## 朝露や乳をくれたる人へ粥

子

間愛の温もりにつき当たる。 人と思う。世の変遷を得て介護することとなったの 人と思う。世の変遷を得て介護することとなったの

# 宵の秋空き地に残る蛇口かな 美代子

で蛇口の存在は重たい。たかが蛇口されど蛇口。の水道の蛇口だが、かって生活が営まれていた家族の人間模様を感じさせる。やがて買い主が出て一変の人間模様を感じさせる。やがて買い主が出て一変をしているのが、来し方の歴史を知る生き証人としている。

# 近世俳諧と漢詩文

王岩

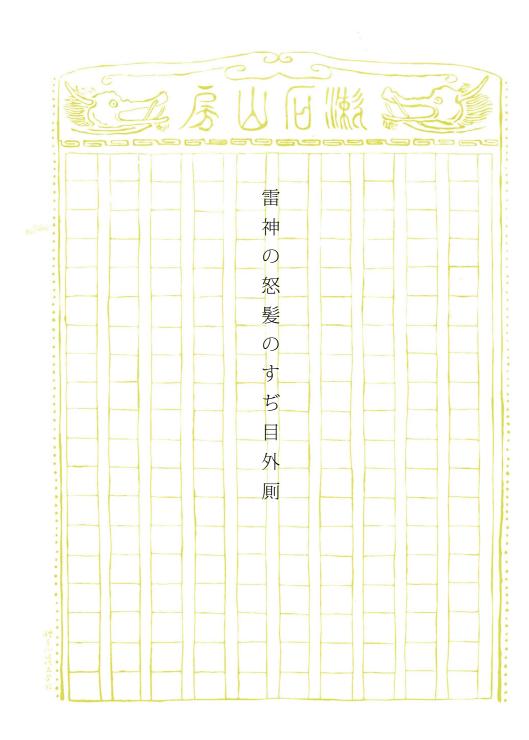
## 木の間もるや梅花の粧ひ月の貌

政 信

陽公主の額上に梅花が落ちた故事に濫觴した「梅花粧 については、すでに許六の「化粧する鏡の中や軒の梅」を解読したところで触れた。 貞門俳諧書『続山井』に載る句である。句中における「梅花の粧ひ月の貌」とは、南北朝の宋武帝の娘寿 (ばいかそう)」を生かした描写だと思う。その故事

貌」(花のかんばせ、月の貌)という成語もある。 はあたかも美人の貌のように美しい。これは文字通りに「梅花粧」である。政信は寿陽公主に因んだ「梅花 一樹の梅花が咲き匂う夜、 の故事を以って、趣向を凝らした奇抜な見立ての句を詠みえた。美しい女性の容貌を形容する「花容月 一輪の春月は丁度梅樹の背後から差し昇ってくる。 梅花を透かして見える月輪

かして詠んだ俳諧である。「白駒過隙」「梅花粧」という故事成語の使用は、 以上、休安、也有、成美、 乙二は「白駒過隙」を、 政信は寿陽公主に因んだ「梅花粧」 短詩型の俳諧に豊富な内容を付 の故事を上手く生



## おを柳集

兼題外

佐藤喜孝

選

### 雷神の怒髪のすぢ目外厠

さであらう。 厠には作者の幼児イメージが濃いのであらうか。それにしても外厠の外し方は俳諧のおもしろ は外厠の家があつた。外でなくとも家の外れに設へてあつた。厠は子供心に恐ろしい所。雷と 普段無謀なことだと思つてゐる。しかしこの「すぢ目」怒髪をよく観察、 雷神の怒髪俵屋宗達の名が浮ぶ。まさに怒髪冠を衝く勢ほひがある。絵画を言語化するのは 見事である。むかし

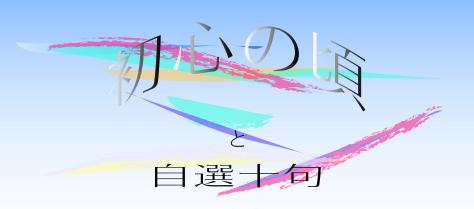
## すき焼きや一族外人顔ばかり

しろがつてしまつた。「すき焼や」で俳句に仕上つてゐる。季語の恩恵である。 の地域の人の顔貌に似てゐるのであらう。私は「すき焼」で肉食系の人種の顔を想像しておも 日本にゐて東アジアの人とすれ違つても全く外人とは意識しない。外人顔といへばそれ以外

### 題詠「外」(順不同

信号待つ外交員の拭ふ汗関東は台風圏外からす飛ぶ彼岸花外輪山へ雲の飛ぶ	大のほか女ばかりの魂まつり大のほか女ばかりの魂まつり	外科の塀白さるすべり咲きつげる 蟷螂を外連と見つつかかづらふ 鳴外の小品を読む夜長かな	雪神の怒髪のすぢ目外厠	台風の外れて朝の眩しかり外つ国の人へ手真似の土瓶蒸し	栗を剥く外で物音手を止める外航船遠くにいだき秋夕焼	言外にとがむる父の声ぬくし雲外を近しと思ふ天の川秋深む時に外米うまかりし	濃紫陽花外交員の口車
田中	木村		竹内	長崎	森		吉弘
藤穂	木村茂登子		弘 子	桂子	理 和		恭子

外来種亀の数増す秋の風





解雲日々の方便の外まはり 外順閻魔こほろぎ踏みさうな 外順閻魔こほろぎ踏みさうな 外堀から聖橋へと秋の声 木犀を曲るとすぐに点く外灯 猿山も外のベンチも秋しぐれ 曼珠沙華夜は目線を外らす猫

佐藤

喜孝



すき焼きや一族外人顔ばかり

篠田

つらら育つはさび し 喜 ば L

日 向 ぼ Z ひとり が 指 に 繃 帯

慂か分かりませんが、

歳時記を藉してくれて、

当時十七才の私の、どこをどう見込んでの慫

数日後には句会にも同行。いわゆるビギナーズ・

ラックで入点句があったのが今に繋がっている

禅の絵師で、

:の絵師で、中さんとおっしゃる方でした。俳句の世界に慫慂して下さったのは、加賀

土 瓶 などさび L V 時 0) た め に 買 Z

瓦どち私語する 霜 0) Z に

り

け

り

と思われます。

その歳時記、「大切なものだから返してくれ

焼 藷 0) 屋 台 に 塀 0) 高 きこ

昼 す に 月 を は む 歓 咲 け

で

ぐ

<

合

り

白玉 か す V とん か 作 り つ つ あ り

羽 蟻 翔 つ 青 垣 Щ ŧ れ る 大

今 朝 秋 0) ポ ス O色 が 怪 L か 5 ぬ

1

蕎 麦を刈 る天に 大きな影うご

定梶じょう 後上京した時には鞄の中に入っていたのです。 よ」とおっしゃってお借りした筈なのに、その 貰った記憶は一切ありません。どうも、 わが物としたようなのです。

やっぱり鞄の中に入っていたのです。 棄し資料を友人に譲った時も、 おおよそ七年後、帰郷、就職することになっ もう句を作ることもあるまいと、 その歳時記は

捨てずで蔵書のどこかにあるはず。 何とも情けないことをしたもの。今も、

早崎泰江

した。 きのみや」句会に初めて参加させていただきま 二〇〇〇年三月、竹内弘子さんの主催する「つ

忘

れ

たきこと多き日

々

雲

0)

峰

セ

ン

サ

ラ

イ

卜

通

り

抜

け

た

り

猫

0)

高

原

O

Щ

烟

り

た

り

栗

0)

花

ずかしい限りでした。 変上手に答えられまして、 らぬと云う苦行が待っていたのです。 張しました。 ました。吟行も、句会も始めての経験で大変緊 ら、選句した句についてその理由を答えねばな その日は渡瀬遊水池野焼の吟行と句会があり 自分の句の拙いのは然ることなが 私の訥弁は何とも恥 皆さん大

います。 から「あを」入会のお誘いを受け今日に至って 子御夫妻にお会いしました。 この野焼き吟行会で「あを」の佐藤喜孝・恭 その後、 恭子さん

まですが、言葉に苦心する楽しみを出来る限り 続けたいと思っています。 私にとって俳句は手強く、 まだ初心の頃のま

小

言

が

つ

れ

な

<

S

び

き秋

深

む

説を読

み

たく

な

り

秋

の雨

風

る少

年

少

女

吹

奏楽

螢

袋虻

0)

唸

り

に

Z

<

らみ

鶏

頭

花

不

死

身の

く立ち

つ

す

籾

殼

0)

燻

る煙や

おだ

B

か

に

漱

石

0)

小

さき菫

に

出

合

 $\mathcal{O}$ 

た

**n** 

29

加賀友

### あをキーワー ド俳句辞典(かし)

菓子		過疎	
春休おまけの付きし昔菓子	鈴木多枝子	過疎の村あやめひともと咲き残る	関口ゆき
掌に受けし綿菓子ねばる酉の市	渡邉 友七	遠蛙水豊かなる過疎の島	森山のりこ
わらび菓子口いっぱいにひろごる香	河合 笑子	柿若葉子らの声なき過疎の村	芝尚子
てのひらの硬貨のにほひ氷菓子	後藤 志づ	山茶花の照り耀へり過疎の村	田中 藤穂
春暁や抱へる母の袋菓子	吉弘 恭子	新成人振り返り見よ過疎の故郷	木村茂登子
奈良の夏菓子にそれぞれ万葉歌	安部 里子	数ふ	
ガス		梅雨入やこめかみで脈数へをり	斉藤 裕子
鳥居出ず夏至の太陽排気ガス	東亜未	手のひらの薬数へて寒の水	鎌倉喜久恵
瓦斯灯をゆけむりよぎり細雪	吉成美代子	錠剤を数へ今年も冬となる	遠藤実
十薬の中に隠れしガスメータ	早崎 泰江	春隣豆大福の豆数へ	安部 里子
瓦斯タンク聳ゆ五月の景として	定梶じょう	並べては数へては子の木の実かな	吉成美代子
白砂青松故郷排気ガスに秋思	長崎 桂子	家族	
煮こぼせる瓦斯の立消え春の風邪	竹内 弘子	報道の家族から遺族へ菊の秋	赤座 典子
火星		螢火や家族の夕餉起伏なく	渡邉 友七
火星見んと上る物干し生身魂	竹内 弘子	愛犬も家族の一人賀状書く	須賀 敏子
去ってゆく火星小さしちちろ鳴く	田中 藤穂	その日から家族の真中風車	森理和
火星大接近ひと足前へ出て仰ぐ	佐藤 喜孝	冷やし瓜家族揃ひて写真かな	山荘 慶子

#### 九月の句会

#### 傳 中野区 カフェ傳

星一つ天空に秋来てゐたり 来し方へほっと振り向く秋桜 朝露や乳をくれたる人へ粥 幽けくも虫の声あり見附跡 秋暑し手動で開けし青梅線 正眼の構ヘイチロー夏負けせず 病むことなど知らぬ七日か法師蝉 空を見て目薬をさす終戦日 川音にいつしか慣れてすすきの穂 富士山が小首かしげる暑さかな 蟇正座正座で近寄り来 夏に負け五臓六腑を感じをり 水に足つかまれてゐる出水かな 八月や何もせぬ日々過したり いなびかり語尾はっきりと言ってくれ敦 山陰に残菊の匂ひかすかにす いくつにも雲のちぎれて法師蝉 茂登子 綾 喜久恵 敏 弘 美代子 泰 藤 喜 江 孝 子

> 水際を飛沫を上げて蟻走る きのみや 寒 林

岸町公民館

野の塑像あふぎて日傘あみだにす 秋の空枝から細き枝出づる どことなく心細げな昼の虫 学帽の細くび白く休暇果つ 近道に細き道なり秋の蛇 貝細工窓辺に夏を逝かしめし 綾 喜 泰 藤 子 孝 江 子 子

#### 七座句会 中野区・ 小川苑

蝦蛄たぶるときは両手や老いけらし 灯台の変らぬ白さ鷹渡る 四世代集ふリビング水中花 法隆寺堂内に座し秋の声 黒南風や猫の尻尾のうごくうごく 白黒のテレビが来た日生身魂 寄り添ひて線香花火仕舞なり 川は音立てずに流る稲架日和 万歳の二唱でありし運動会 須磨子 理 綾 東亜未 藤 恭 喜 寒 木 穂 和林枯 子 子 孝

> カフェ傳 森 理和傳句会 毎月第2火曜 (03-3368-4263) 理和

調句会 岸町公民館 竹内弘子 毎月第3金曜 (0488-86-3501)

あを吟行会 詳細は吟行案内で

七座句会 (090-9839-3943) 吉弘恭子 毎月第4火曜

を叢書にである。 初の記憶』の上梓、そして今般の限定一部といふ、あ やはり積重ねてきた会員の作品の山に勝る物はな 来た。「あを」はマイペースで歩いてきた。楽しみ た。記念句集も出席者の分は間に合はせることが出 勝てない。当日は晴天に恵まれ櫨の初紅葉を堪能し 延をしてゐる。心は焦るばかりだが、寄る年波には い。その成果として十年分の冊子「あを」であり、『最 がそんな機会はなかつた。十年の収穫はと振返ると、 ことが起きたらさつさと投げ出さうと目論んでゐた ながら十年経つたのであつと言ふまであつた。嫌な 今月の「あを」は十周年記念事業のあほりで大遅

ていただく。 てゐる。ここにお名前を記し感謝の言葉に代へさせ 「あを」は贅沢にも外部の方々に助けていただい

阿部寒林様・大山夏子様・斧田綾子様・宇都宮敦 句会・吟行とお力添へくださりました八田木枯様

> ざいました。 俳句を揮毫していただいた、天野公子様、関和子様、 子様・安達房代様。ありがとうございました。誌面 保多康成樣。 真の奥田久子様。篆刻でお世話になつた山田梅枝様、 現していただいた衛藤公子様・夏目明彦様。 中島浩子様、武井明子様。俳句を絵や物と組合は表 ではカットと表紙の動物写真の赤座吉保様。あをの カツトの恩田秋夫様。本当に有難うご

佐藤喜孝

#### 二〇一〇年十一月号

電発発 行行 話所日 東京都中野区中央2-50-3十一月二十八日

印刷・製本・レイアウト

房

00130-6-55526(あを発行所)会費 一〇〇〇〇円(送料共)/一年会費 一〇〇〇〇円(送料共)/一年表紙・佐藤喜孝

郵便振替